

「吾思う、故に吾あり」とデカルトが明言したのは四百年ほど前。複雑な問題を細かい要素に分け、疑わしいと思われるものを二元論的に排していった。そして、測定されず量によつて表せないものは、非現実的なものと見なされ、吾が思惟することの延長に、世界はすべて数式で表せるといふ機械論的世界観が生まれた。以来、世界の動きは機械の動きと同じとみなし、近代科学は急速に進歩していった。しかし、デカルトは思惟する吾も機械論の世界も、共に神が造られたものであると考えていたことに僕は着目したい。

さて現在、人の思惟の延長にある科学の発達、特にデジタル情報機器の発達は、物事の曖昧性を排除し、原因と結果の因果関係とその根拠を明確に解き明かす。電話の発信記録、街中の監視カメラ、ATMでの入金記録、コンピュータのデジタル記録などは、自分を離れて電脳世界に正確に半永久的に記録される。これらはM・フォーコーの言うバナブティコン（囚人環境装置）の現代版として確実に機能している。何かあれば時を遡り、いつでも自分の行為はデータとして表出される。この時、自分は自分の中にはない。行為する自分の身体軌跡が自分となる。これは間違いない事実だ。

今は亡き脚本家・高木均の「地球の迷い方」(東京創元社)は「ひとくさり旅の話である」の一文から始まる。宿代はいくらだ、宿の親父が親切かどうか、屋台で何を食べた、交通費を値切った、ぼられたなど、そんな類いの話で終始している。でも、高木は旅で自分に課していることが二つある。一つは値段の安さへの執着、もう一つは夕刻になれば屋台やバブに出かけ、まずは一人冷えたビールを飲みほすことだ。そして、席を同じくする人と世間話をすることも。思いついたら、地球のどこかの街角へと出かけて行く、たけの旅にどんな意味があるのか、僕はしばしば思いを巡らす。高木はまずもって自分自身が最も興味のある対象なのだ。街角でどこの流れ者かと思われても全く意に介さない。誰もがホッと一息入れる時声をかけてもらえる自分、その声に屈託なく声を返せる自分、そんな自分に出会うことが高木にとって至福の時となる。

さて、自分を振り返る。若い頃は声高に主張したり、遅れまいと流行を追ったり、様々な論争をしたり、そうして僕は自分を高めてきたに違いない。そして、組織の一員として立場を獲得してきたのだろう。それを仮に生きるための「縦軸」の広がりだとするれば、高木はそれとは別の「横軸」の広がりがあるのではないかと考えている。この「横軸」の広がりは人を縦軸による同質性の系列化から切り離し「個」の世界に開放する。そして、人は個としての自分に気づいた時、多様性と異質性のある曖昧な世界で立ち止まり、改めて自分の立つ位置を確認しようとするものだ。この曖昧な世界こそが、科学の進歩の基礎となったデカルトの機械的世界観を生み出すために、思惟する吾を支えてくれた「神」というものではないのかと僕は思う。一体自分はどこにあるのだろうか。そう思うとき、この「横軸」という考え方が僕の心をよぎる。



自分の座標軸が曖昧になったらこの本を手取る

自分と「地球の迷い方」

Watanabe Tomoki

渡辺 知樹

学生体験記

人間科学科のSA制度に参加して

人間科学科では今年度から、一年次の基礎ゼミナールに各クラス二名ずつのSA（ステューデントアシスタント）を配置している。上級生と下級生がお互い刺激を与えあう機会を作るこ

とが、この試みのねらいである。以下、そのうち二名に「SAとは何か」を紹介してもらった。初年度で手探りしながら活動しているためか紹介文はややおとなしめだが、一年生のゼミのなかでの彼らの存在はすでに大きなものとなっている。

（奥田 統巳）



一年生の基礎ゼミナールのSAの仕事をはじめから数カ月が経とうとしています。私たちが担当する五組（杉山ゼミ）は、生命倫理を主にしたゼミです。

六グループに分け、尊厳死安楽死・死刑・セクシャリティなどは各自グループでテーマを選びます。そのテーマから文献やインターネットを利用し、歴史・問題点・改善策などを考察した後、レジュメをつくり発表しています。

一年生は皆、テーマの内容にそつた資料をあつめ、どのような構成でレジュメを書くかを各グループで真剣に話し合っている。刺戟を受け感心することも多々あります。発表に関しては未熟なところもありますが、それをサポートするのが私たちの仕事なのでゼミ以外でも活かすことができましたら良いと思います。

（人間科学科四年

牧田 弘子）

我々がSAとして行っていることは、レジュメの作り方などの基本的な事柄の指導を中心に、ゼミのテーマである「生と性と死」についてという幅広い設定の中、彼らにとって後にも

役立つような文献を紹介するなどしてあります。そこから彼ら固有の、学生生活をかけるに値するテーマを見つけてほしいです。

講義中は彼らの発表を聞き、討議にも参加し、質問して、しゃべってます（みんなもつと質問・意見を）。さらにはコミュニケーションを密にするためにコンパをセッティングしたりしなかつたり、まあいろいろです。

「生と性と死」といっても、具体的にはエイズや安楽死など世界的にみてもアクチュアルな事柄についての調査と考察であり、そうした事柄の知識の共有は学生たちの新たなパースペクティブを開いてくれること請け合いです。以上！

（人間科学科四年

小林 和也）

私の財産

六月十日から三週間、母校で教育実習を行いました。私の母校は英語に力を入れていたが、その高度な英語教育についていくことができない時期もあったので、正直、実習に行くのは不安でした。

私の担当は英語四クラス、授

業実習三時間、HRは二年八組でした。今まで大学で一時間分の授業を作るのに約一週間かけていたものを三週間で三時間なんて、信じられませんでした。他の実習生は私の半分以下の授業数なのに、なぜ私だけと落ち込んだりもしましたが、これは神様が与えてくれた大チャンスだと、たくさん授業を行える喜びに気持ちを切り替えました。

初めのうちは一つ一つの失敗に落胆していましたが、そんな暇などないほど忙しい毎日が続きました。私は陸上部も見ていたので、睡眠時間は平均二時間でした。疲労困憊でしたが、「先生、先生」と話しかけてくれる生徒達といると疲れは吹き飛びましたし、あの子たちの笑顔は何より励みになりました。

最後の研究授業は二年八組でした。母校の先生方や大学の教授など、教室は参観者であふれました。これほど緊張したのは、この三週間ではこの日が一番です。しかし「皆で打ち合わせしたからバッチリだよ、先生頑張つてね！」そう言ってくれた生徒達、そしてこれを使え。「Do your best」と言つて昔から愛用していた棒をお守りにくれ

た恩師（高校時代の担任であり英語の先生）：たくさんの人に背中を押され、研究授業に臨むことができました。授業は、私が期待していたものをはるかに超えていました。懸命に発言し協力してくれる生徒達を見て、涙がこぼれそうでした。合評会では、先生方から非常に高く評価して頂き、生徒達のおかげだと心から思いました。

実習最終日、生徒達は私の為に替え歌を作り、歌ってくれました。この時ばかりは人目を気にせず声を出して泣きました。本当にありがとう、大好きな生徒達。「先生、本当の先生になるからね。」この実習は私の財産です。

（英語英米文学科四年

長田 恵理）

大学院への進学体験記

私が大学院を目指そうと思いはじめたのは、高校三年生の時でした。その頃から臨床心理士になりたいという思いがあり、高校生の時から漠然と「大学院に進学したいな」と思っていました。大学入学後もその気持ちは変わりませんでした。大学一

われ、進学のために勉強をしよいうと計画を立ててもなかなか継続することが出来ずにいました。三年生になり、いよいよ本格的に進学への勉強を始めなくては……と焦り始めた頃に、知り合いから勉強会へのお誘いを受けました。それは、大学院への進学を目指す方々が集まって英語を勉強するという勉強会でした。それまでは、独学での勉強を主にしていたので、初めはグループでの勉強会に馴染めるかとても不安でした。しかし、

厳しくも温かく見守ってくれる先生、同じ目標に向かって勉強をする仲間に出会って、常に不安を抱きながらも、がむしゃらに立ち向かっていく姿勢でいられるようになりました。もし、一人で勉強していたとしたら不安に押しつぶされてしまっていたかもしれません。沢山の方々との繋がりがあったからこそ、受験勉強にも立ち向かっていったのではないかと思えます。大学院生活においても、「人と人との繋がりを意識しない日はありません。お互いに鼓舞しあい、高めあっていくことが出来る仲間と出会えたことにも感謝をしています。これから、大学院への進学や受験を控

えている方々も「人との繋がりを大切にしながら目標に向かって歩んで欲しいな」と思っています。

（臨床心理学研究科一年

徳田 朱莉）

こども発達学科のSA制度に参加して

私は今回SA (Student Assistant) に参加して様々なことを学ぶことができました。

SAとして参加した『地域の子ども連携マネジメント実習』は、去年、私たちが受けた講義です。私たち三年生は第一期生ということもあり、去年は何をするにも手探り状態でした。なので、二年生たちには私たちが経験したことを伝え、経験を生かして、去年以上にいい行事ができるようにサポートをしたいと思ひSAに応募しました。

はじめは、二年生の中に入ることに少し抵抗がありました。でも、担当の先生方、SAの仲間たちと話し合いする機会があったので私の不安や悩みを話し合うことができ、二年生たちにもいい結果を与えることができました。しかし、最後まで解決できな

い問題もありました。それは、SAが二年生に対してどういう立場で接していけばいいのかわからない問題です。SAとは、先生とも生徒ともどちらとも言えない立場でした。なので、二年生に対してどこまで口出しをしていいのか、どこまで手伝つていいのかという境界線がとても判断し難いということがありました。このことは、他のSAの人たちや先生たちとも話し合いましたが、はつきりした答えは見つかりませんでした。

来年は二年生がSAとして、今の一年生の中に入って行くと思います。SAをやってみて最後には二年生とも仲良くなり、一つの講義を作りあげていく大変さといった、自分のためになることが数え切れないほどあります。本当にSAをやったよかったと思っています。今年の私たちの活動を生かし、来年はもっといい行事をつくりあげることができればいいと思います。

（こども発達学科三年生

高瀬 愛里）

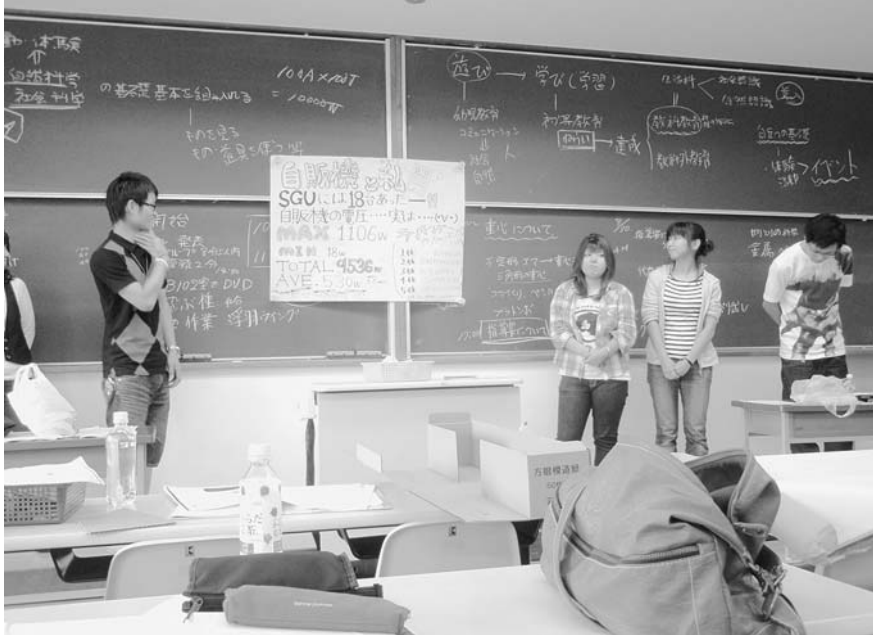


二〇〇八年度

人文学部夏期集中講義

今年の夏休みも、いくつもの集中講義が行われた。今回は、こども発達学科の「生活科指導

法」を受講した二年生の福士友佳子さんに、講義内容の紹介とその感想をいただいた。



* * * *

〇〇指導法と聞くと、指導案の書き方を教わるだけ、と思いがちです。しかし、私が受講した生活科指導法では、指導案の書き方はもちろんのこと、その他実際に教壇に立った時に使えるようなスキルを学ぶことができました。植物の根の長さ調べからはじまり、葉脈の葉作り、プラトンボ作り、起き上がりこぼし作りなどの体験は時間が過ぎるのを忘れるほど楽しいものでした。また、学校探検をしよう!! ということで、めったに行くことのできない理事長室や学長室に行く機会もありました。屋上へ続く怪しい階段や、迷路のような廊下を探検していると、まるで自分が冒険家にもなったような気分になりました。大学生の私たちでもこんなに楽しめるものなら、好奇心旺盛な小学生にとってはなおさら楽しいものだと思います。そんなワクワクとドキドキが詰まった授業を私も子どもたちに体験

させたいと感じました。

最終日には各グループごとに一つの指導案を選び、模擬授業を行いました。私は「砂鉄入りスライムを作ろう」という指導案を作り、グループの代表として模擬授業をすることになりました。今まで、模擬授業をしたことがなかった私はきちんと進行できるかどうか不安だったのですが、前日にリハーサルをして本番に臨みました。私は、模擬授業をしている間、本当の小学生に接する時と同じような言葉遣いや態度をとることを心がけていました。

模擬授業が終わった後、先生から「どの児童が失敗して、どの児童が成功したか、チェックしたのか?」と聞かれましたが、私は正確にチェックしていなかったため、「左半分の班は大体成功しました。」と答えました。先生は、成功していない児童には成功した例を見せなければならぬ、とアドバイスをくれました。どのくらい砂鉄を入れれば成功するのか、自分たちの班には何が足りなかったのか、考えさせなければならぬというのです。確かに私は模擬授業の最中、児童が楽しめればいい、ということだけを考えて

いた気がします。自分の作成した指導案で児童に何を教えたいのか、それが児童の生活にどのように関わっているのかはあまり考えていなかったのです。

私は今回の生活科指導法を通して、ただ楽しいだけの授業と、楽しい中でも生活に必要な技術や考え方を養うことのできる授業は違うということを知りました。ただ楽しいだけでは日常の遊びと同じになってしまいます。児童が楽しめることを前提に、たった四五分の授業の中で何を教えることができるかを考えることが大切です。また、授業の材料は普段の生活の中になくさん潜んでいます。いくつ良い素材を用意しても、それを生かすか殺すかは教師自身。このようなことを学ぶことができた三日間でした。

* * * *

集中講義は、名のごとく、その講義内容だけを考え続ける日々が続く。通常の授業とは違った講義構成も可能となり、貴重な経験もできる。多くの学生が今年も、充実した夏期集中講義で夏のひと時を過ごした。

(小出 良幸)

人文学部合同講演会

チベット文化、チベット人、チベットを取り巻く現状について

チベットがどこにあり、どんな人々がどんな生活を送っているのか、その現状は、歴史は、文化は、宗教は、日本にいと正直あまり馴染みがない。しかし、今年の三月十日にチベットでは例年通りの平和デモが騒乱と化したこと、その後各国で起こった北京オリンピック聖火リレー中の平和デモ、日本でも善光寺が聖火リレーの出発地点であることを取り下げたこと等は、マスコミの報道で我々の知るところとなった。ただ、テレビ・新聞等から流される情報では、肝心な部分が抜け落ちる場合が多々ある。何かを訴えたい人が存在するにもかかわらず、立ち人間を考察することを標榜する本学部にとり、チベットについて学ぶことは大変意義深い。そこで、前期六月十三日にダライ・ラマ法王日本代表部事務所代表のラクパ・ツォコ氏にお忙しいなかお越し頂き、「チベット文化、チベット人、チベットを取り巻く現状について」という演題でご講演頂いた。

講演内容は、ダライ・ラマ法王のことに始まり、独立国家で

あったチベットの歴史の変遷、チベット文化・チベット仏教をアイデンティティ崩壊へ至らせる政策、漢族資本の大量流入による経済的・政治的・社会的弱体化の問題、核廃棄物汚染による環境問題、豊かな天然資源の利権問題、地政学的理由からの軍事化問題、日本との関係等に及んだ。お話は全て流暢な日本語で、ご自身亡命チベット人としてのお立場から、マスコミによる報道では決して知ることの出来ないチベットの生々しい実情を切々と話された。中国から独立国家として分離独立することを訴えているのではなく、チベットの文化・宗教・環境等を守るために自治権を与えてほしいだけで、チベット人はむしろ中国人と仲良くしたいのです、という言葉に学生も様々なことを感じたようだ。この講演をきっかけに、今後も広い視野を持ち、国の内外を問わず様々な問題に目を向けてほしい。

(山添 秀剛)



これまで六年間の英語キャンプの実績を踏まえ、本年度からは単位化されて集中講義として開講された Oral Communication D にはこれまで最高の四〇名の学生が登録した。昨年と同様に俱知安町のペンションで、三泊四日の日程で八月二十五日から予定通り開催され、最終的には三八名の学生が英語漬けの生活を体験した。

講師陣はこれまでのグロース先生、ヒンクルマン先生に、今年から新たにジョンソン先生が加わり、自己紹介ゲーム、異文化体験シミュレーションゲームなど、英語を活用して、発見と友達作りの喜びを体験する毎日をごした。二日目にはニセコの魅力に取り付かれたオーストラリア人を迎えて、オージーの日常生活について理解を深める機会もあった。彼による

英語を堪能した英語キャンプ



と、ニセコの雪は最高、そして、日本国内の旅行を通じて日本は安全な国であるという印象を深めたとのこと。その後、テニスコートで心地良い

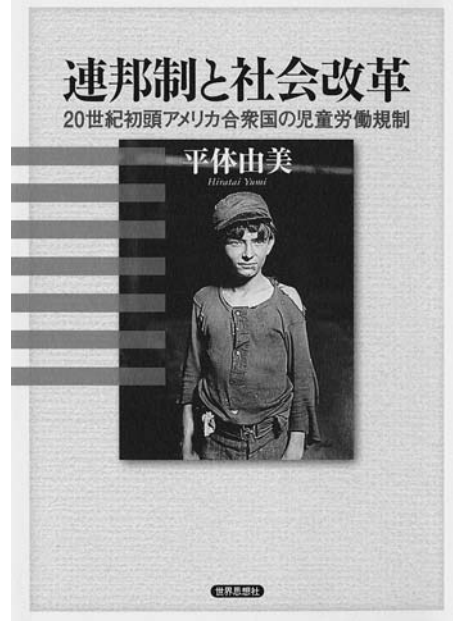
スピーキングばかりでなく、ライティングの実習にも力点を置いた点が今回の大きな特徴となっている。三日目も前日同様、ピリーのブーツキャンプのビデオを見ながら英語で気合を入れて、さまざまな英語のゲームや活動を楽しむ内容であった。

ペンションのオーナー夫婦手作りの料理が、学生たちの旺盛な食欲を満たしてくれ、特に二日目の夕食はバーベキューで、食べ切れないほどの肉、野菜、海産物が供され、炭火が消えるまで食事と談笑の夕べを楽しむことが出来た。

汗を流した。一日の終わりに「はジャーナル(日記)をまとめ、翌朝には添削された英文を念頭に置きながら、その日を振り返った。リスニングや語で楽しむという目的を一人ひとりの学生が達成し、充実感を持ってこの集中講座を終えることが出来た。

(宮町 誠一)

自 著 紹 介



平体 由美 連邦制と社会改革 — 20世紀初頭アメリカ合衆国の 児童労働規制

世界思想社 二〇〇七年

日本におけるアメリカ政治史・社会史研究を概観して気がつくことは、社会的規制を説明する際に、連邦制がもたらす諸問題を説明しているものが少ないことである。産業社会に発生する様々な問題は、時に全国を対象とした統一改革を要請する。しかし、日本人が一般にイメージする「政府」とは違い、合衆国では連邦政府が全国に及

ぶ改革を担えるとは限らない。連邦政府には連邦憲法によって規定された権限の限界がある。そのため、全国に及ぶ改革をどのように実現するかという問題が発生する。本書は制度中心な連邦制紹介とは異なり、これまで十分に説明されてこなかった連邦政府と州政府の管轄権の違い、連邦ポリスパワーの問題、州法統一

化の試み、そして連邦法執行の分析を通して、連邦制が改革運動の方向を決定していく過程を描いた。

具体的には、全国児童労働委員会（NCLC）の活動を取り上げ、児童労働規制要求がたどった複雑な道筋を、連邦制を支える制度と価値規範を通して解説する。資料としてNCLCのマニフェストを中心に、NCLCの関係者の個人資料、統一州法委員会全国会議の議事録を使用し、それぞれの連邦観と改革の目的との間の緊張関係を抽出する。そして、「なぜ連邦児童労働法をめぐる議論が連邦のありかたをめぐる議論になっってしまったのか」について議論する。

第一章においては、州権論の根拠となる二十世紀初頭における多様性の意味と、児童労働の地域的多様性について概観する。第二章では十九世紀を通して成立したいわゆる二元制連邦制の下、全国統一的規制を実現することがどのように困難だったのか、統一のなるものがどのような批判を受けていたのか、一方でどのような分野であれば統一的規制が可能だったのかを論じる。その際、「ナショナル

な悪」と呼ばれた諸問題——児童労働も含む——と、その全国統一的規制を可能にした「連邦ポリスパワー」を手がかりとする。第三章ではNCLCの初期の活動に注目し、組織内部での州規制派と連邦規制派の対立を通して、児童労働規制の様々な問題を浮かび上がらせる。その際、どの問題を優先し、何を後回しにしたのか、その理由は何かについて考える。第四章ではNCLCの内部で連邦規制派が州規制派を押さえて組織の活動方向を決することになった事情と、連邦児童労働規制法成立までのNCLCの活動、および連邦議会の動向を追う。第五章は連邦児童局の活動と連邦最高裁判所による司法審査を通して、

二元制連邦制が児童保護に与えた影響と限界を議論する。最終的に、①二元制連邦制の下では州の自治が自由の保障装置と理解されていたこと、②それゆえに本来州の役割である児童労働者保護を連邦が担当することは大きな体制の転換として受け止められたこと、③連邦児童労働法は広い意味での児童保護の一部をなすに過ぎず、直接的には児童労働者の削減にわずかに貢献したに過ぎなかったこ

と、④ただし連邦制の下では連邦法が各州への「浸透効果」と「技術移転」をもたらす、間接的に児童労働者保護に貢献したことを、議論する。

本書を貫く問いは「アメリカではなぜ全国統一的規制が困難なのか」である。社会改革や規制を全国一律に行なうものと考えがちな我々とは異なり、アメリカでは全国統一的規制は、立法化そのものが制度的に困難であるのみならず、実施にあたっても様々な問題が生じる。改革は常に地域単位、大きくても州単位なのである。この発想は歴史的にもイデオロギー的にも根強い。アメリカの政治制度——連邦制はその歴史とイデオロギーの中から誕生し、一方でそのイデオロギーを強化する。だからこそ、改革を全国に及ぼしたいと考えるとき、そこには様々な政治的制度的・イデオロギー的制約があり、それらを一つ一つ突破する戦略が要請されるのである。「なぜ全国統一的規制が困難なのか」という問いは、この論者が対象としている二十世紀初頭だけでなく、現代のアメリカにおける社会問題に注目する際にも重要な問いとなりうる。

（平体 由美）

留研を終えて

昨年度十月一日より一年間、米国立フォルニア大学バークレー校にて在外研究に従事しておりました。九月末日に無事帰国し、本年度後期から本務に復帰して、全学共通の英語と専門科目のアメリカ文学を担当しております。

バークレー校では主に世紀転換期(十九世紀末)のカリフォルニア作家フランク・ノリスの小説研究に取り組みました。ノリスは一八八〇年に起きた鉄道

資本と小麦栽培者との闘争を題材とした『章魚』でアメリカ文学史に名を残しています。私はバークレーにあるノリス研究資料にあたり、またノリス作品の舞台となったサンフランシスコやカリフォルニアの各地を実際に見て回るなど有意義な時間を過ごすことができました。

在外研究期間中は毎日大統領選挙戦のニュースがテレビや新聞で報じられ、米国民は一年かけて大統領を選ぶわけですが、大学カフエの壁に掛けられた大型液晶テレビに候補者二人の討論が映し出されると学生は皆、釘付けになって画面を注視しており、彼等の意識の高さが印象的でした。貴重な時間と経験をいただき、人文学部教授会をはじめ、学園・大学に感謝申し上げます。今後の教育・研究に活かせるよう努力する所存です。

(岡崎 清)



2008(平成20)年度人文学部校務分掌

2008年4月1日

役職・委員会等の名称	学部枠	人 間 科 学 科	英語英米文学科	臨 床 心 理 学 科	こども発達学科
学部長		○奥谷		滝沢	
大学院研究科長				森	◎小林
学科長		船津	○宮町	○井手	
心理臨床センター長				○田形	◎鈴木
人文学部教務委員会 (含 視聴覚・LL担当委員)	5	臼杵、新田	○山添、◎(グローズ)		
人文学部広報委員会 人文学部報編集委員 人文学部WWW管理者	4	奥田、山越 (WWW、山越)	◎坪井、○(西)		◎小出
人文学会幹事会		舛田	◎川瀬	寺沢	
全学教務委員会	1	臼杵			
学生委員会	1	木戸			
進路支援委員会 (就職委員会(全学))	4	内田、藤野	中村	◎葛西	(鈴木)
学部入試委員会 (広報入試委員会(全学))	4	鶴丸、(松川)	○平体	○佐野	◎大瀬
図書委員会	1			安岡	
総合研究所運営委員会	1	舛田			
電算機センター運営委員会			◎ヒンクルマン		
国際交流委員会	1				◎諸
国際交流センター所員			○グローズ、○西		
教職課程委員会	1	富田、工藤 工藤、富田、 (片桐)(小原)	◎(櫻田)		渡辺 (虎尾)
国庫助成教授会連合		○笹岡			
学生相談室相談員 (総合教育センター)					
部門協議員		○内田	西、○(ヒンクルマン)		○諸
各類協議員					
学長		☆布施			
全学部長職		松本(総合研究所)	○菅原(入試)		◎新國(図書館長)
全学委員長職					
大学協議員(学部選挙)	2		宮町		○小林
大学協議員(センター選出)		●内田、船津			
理事(選挙)					
教員評議員(選挙)	1			森	
留研		湯本(後期)	岡崎(前期)	橋本(通年)	

備考 1. ○印は継続 2. ◎は3年目 3. ●は4年目 4. ☆は5年目 5. ()は、正規委員ではなくサポート役

二〇〇八年度前期末

学位記授与式

—新たに九名が卒業—

本年度の前期末学位記授与式(卒業式)が九月三十日、本学G館(創立五〇周年記念館)で挙行された。全学で四一名の新たな学士が誕生した。

人文学部では人間科学科から六名、臨床心理学科から三名の卒業生を送り出した。

三月の卒業式と同様、学位記(卒業証書)は学部長より授与された。また、式後の卒業祝賀会はG館のレストラン文泉にて開催された。それまでの苦労話や思い出話など、卒業生を囲みながら、学長をはじめ教員・職員の輪がいくつもできた。これで人文学部の学士号取得者は六、三三六名(人間科学科四、〇六三名、英語英米文学科一、八五二名、臨床心理学科四一名)となった。

2008年度学部教員の人事・研究活動等

(4/2/10/1)

◎在宅研究員

●湯本 誠 ○八年十月一日
〇九年三月三十一日

◎海外研究出張

●臼杵 勲 ○八年八月七日
〇九年九月十日 モンゴル「モンゴル国における中世城郭調査」

●臼杵 勲 ○八年九月二十
九日〇十月六日 ロシア「ア
ムール中流遺跡資料の調査」

●川瀬 裕子 ○八年八月二十
七日〇九月十日 中国「舞台
芸術研究のため中国京劇院見
学及び観劇」

●菅原 秀二 ○八年九月十二
日〇二十一日 アメリカ「研
究交流・資料収集・学会出
席」

●鶴丸 俊明 ○八年六月二十
二日〇二十六日 モンゴル
「科学研究費調査資料の持ち
出しと返却」

●鶴丸 俊明 ○八年九月一日
〇二十一日 モンゴル「科学
研究費によるモンゴルとの共
同発掘」

●富田 充保 ○八年八月二十
四日〇九月一日 フィンラン
ド「フィンランドの若者・子
ども支援環境調査」

●藤野 友紀 ○八年九月七日
〇十五日 アメリカ「国際学
会(ISSCAR)にて発表及
び資料収集」

●森 直久 ○八年九月七日
〇十五日 アメリカ「国際活
動理論学会への参加と研究発
表」

●山越 康裕 ○八年八月二十
七日〇九月五日 中国「科
研費研究課題に基づくシネヘ
ン・ブライヤート語文法記述及
び口語資料収集のためのフイ
ールドワーク」

◎出版物

●杉山 吉弘(共著)井上芳保
編『セックスという迷路』長
崎出版 二〇〇八年四月二十
五日 三六〇頁 二二〇〇円
十税

●松本伊智朗(浅井春夫、松本
伊智朗、湯澤直美共編著)『子
どもの貧困―子ども時代のし
あわせ平等のために』明石書
店 二〇〇八年四月十五日
三五五頁 二三〇〇円十税

◎委嘱発令

●奥谷 浩一 江別市社会教育
委員(江別市教育委員会)○
八年八月一日〇一年七月三
十一日

●富田 充保 北海道私立大学
教職課程研究連絡協議会事務
局長(同協議会)○八年四月
〇九年三月

●菅原 秀二 ローターリー財団
国際親善奨学金委員会委員長
(国際ロータリー第二五一〇

地区)○八年七月一日〇九
年六月三十日

●田形 修一 日本心理臨床学
会大会委員会委員(日本心理
臨床学会)○八年七月一日か
ら〇九年十月三十一日

●新國三千代 日本聴覚障害学
生高等教育支援ネットワーク
運営委員(国立大学法人筑波
技術大学)○八年四月一日〇
一〇年三月三十一日

●新國三千代 北海道大学情報
基盤センタープログラム指導
員(国立大学法人北海道大
学)○八年四月一日〇九年
三月三十一日

●藤野 友紀 北海道大学大学
院教育学研究院附属子ども発
達臨床研究センター研究員
(国立大学法人北海道大学)
○八年四月一日〇九年三月
三十一日

●安岡 馨 札幌市精神医療
診査会医療委員(札幌市)○
八年四月一日〇一年三月三
十一日

◎研究助成

●臼杵 勲 「考古学と年代測
定学の併用による環日本海北
部の古代・中世遺跡年代の研
究(財団法人福武学術文化
振興財団)八〇万円

●臼杵 勲 「契丹城郭の比較
考古学・文化財学研究(日本
私立学校振興・共済事業団)
二六〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「十八
世紀イギリス都市における市
民的社交圏の形成―地域社
会、消費文化、貧困―(文
部科学省科学研究費基盤研究
(B)三〇万円

●松本伊智朗「子ども虐待問題
と被虐待児の自立過程におけ
る複合的困難の構造と社会的
支援のあり方に関する実証的
研究」主任研究者(厚生労働
科学研究)一五五万七千円

●松本伊智朗「子どもの貧困の
現代的様態と生成課程に関す
る研究―要保護児童施策と家
族支援の課題」分担研究者(科
学研究補助金)三〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「複合
国家イギリスの社会変動と宗
教に関する地域史的研究・学
際的アプローチ」(文部科学
省科学研究費基盤研究(B)五
〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「十八
世紀イギリス都市における市
民的社交圏の形成―地域社
会、消費文化、貧困―(文
部科学省科学研究費基盤研究
(B)三〇万円

●松本伊智朗「子ども虐待問題
と被虐待児の自立過程におけ
る複合的困難の構造と社会的
支援のあり方に関する実証的
研究」主任研究者(厚生労働
科学研究)一五五万七千円

●松本伊智朗「子どもの貧困の
現代的様態と生成課程に関す
る研究―要保護児童施策と家
族支援の課題」分担研究者(科
学研究補助金)三〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「複合
国家イギリスの社会変動と宗
教に関する地域史的研究・学
際的アプローチ」(文部科学
省科学研究費基盤研究(B)五
〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「十八
世紀イギリス都市における市
民的社交圏の形成―地域社
会、消費文化、貧困―(文
部科学省科学研究費基盤研究
(B)三〇万円

●松本伊智朗「子ども虐待問題
と被虐待児の自立過程におけ
る複合的困難の構造と社会的
支援のあり方に関する実証的
研究」主任研究者(厚生労働
科学研究)一五五万七千円

●松本伊智朗「子どもの貧困の
現代的様態と生成課程に関す
る研究―要保護児童施策と家
族支援の課題」分担研究者(科
学研究補助金)三〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「複合
国家イギリスの社会変動と宗
教に関する地域史的研究・学
際的アプローチ」(文部科学
省科学研究費基盤研究(B)五
〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「十八
世紀イギリス都市における市
民的社交圏の形成―地域社
会、消費文化、貧困―(文
部科学省科学研究費基盤研究
(B)三〇万円

●松本伊智朗「子ども虐待問題
と被虐待児の自立過程におけ
る複合的困難の構造と社会的
支援のあり方に関する実証的
研究」主任研究者(厚生労働
科学研究)一五五万七千円

●松本伊智朗「子どもの貧困の
現代的様態と生成課程に関す
る研究―要保護児童施策と家
族支援の課題」分担研究者(科
学研究補助金)三〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「複合
国家イギリスの社会変動と宗
教に関する地域史的研究・学
際的アプローチ」(文部科学
省科学研究費基盤研究(B)五
〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「十八
世紀イギリス都市における市
民的社交圏の形成―地域社
会、消費文化、貧困―(文
部科学省科学研究費基盤研究
(B)三〇万円

●松本伊智朗「子ども虐待問題
と被虐待児の自立過程におけ
る複合的困難の構造と社会的
支援のあり方に関する実証的
研究」主任研究者(厚生労働
科学研究)一五五万七千円

●松本伊智朗「子どもの貧困の
現代的様態と生成課程に関す
る研究―要保護児童施策と家
族支援の課題」分担研究者(科
学研究補助金)三〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「複合
国家イギリスの社会変動と宗
教に関する地域史的研究・学
際的アプローチ」(文部科学
省科学研究費基盤研究(B)五
〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「十八
世紀イギリス都市における市
民的社交圏の形成―地域社
会、消費文化、貧困―(文
部科学省科学研究費基盤研究
(B)三〇万円

●松本伊智朗「子ども虐待問題
と被虐待児の自立過程におけ
る複合的困難の構造と社会的
支援のあり方に関する実証的
研究」主任研究者(厚生労働
科学研究)一五五万七千円

●松本伊智朗「子どもの貧困の
現代的様態と生成課程に関す
る研究―要保護児童施策と家
族支援の課題」分担研究者(科
学研究補助金)三〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「複合
国家イギリスの社会変動と宗
教に関する地域史的研究・学
際的アプローチ」(文部科学
省科学研究費基盤研究(B)五
〇万円

編集後記

人文学部報の二九号では、学部の教員や学生たちの活動や教育、研究などを紹介しました。紙面が足りず、一部しか紹介できなかったのが残念です。人文学部は一九七七年四月にスタートし、昨年で三十年が経過しました。三周年を記念して、今年から来年にかけて記念行事が行われます。人文学部報は一九九四年十月に創刊され、次号で三十号となります。三十号では、三周年の記念事業と連動して、紙面を一新しようと検討しています。(編集委員長 小出良幸)